自閉症児の
携帯式コミュニケーションブックを
使用しての要求

事例の概要

【対象児】

A児（特別支援学校小学部4年　男児）
自閉症　太田のStage Ⅱ

【指導場面】

課題学習の時間　→　スケジュールでお茶を提示された時

【般化場面】

給食後　→　スケジュールでお茶を提示された時
昼休み　→　スケジュールでお茶を提示された時

【教材】

お茶，コミュニケーションブック

指導目標

【長期目標】

校外(公園，食堂)で携帯式コミュニケーションブックの中から，カードを選び，構文し教員に手渡す。

【短期目標】

校内(授業中，休み時間)で携帯式コミュニケーションブックの中から，カードを選び構文し，教員に手渡す。

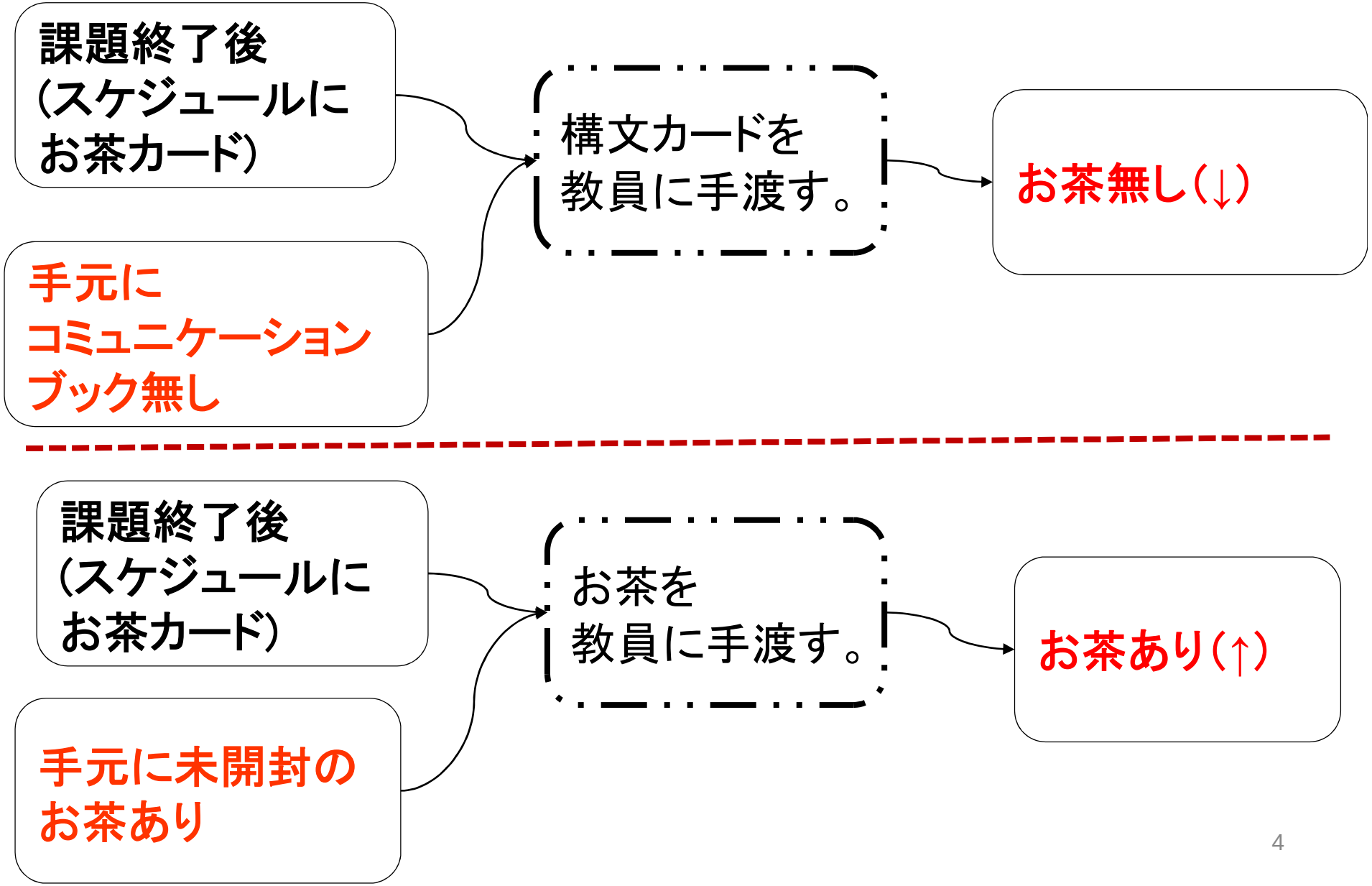
【標的行動】

お茶を飲む時に，携帯式コミュニケーションブックの中から，「〇〇先生」「お茶」「下さい」のカードを選び，構文した後。

↓

構文カードを教員に手渡す。

現状のABC分析


課題終了後
(スケジュールに
お茶カード)
手元に
コミュニケーション
ブック無し
構文カードを
教員に手渡す。
お茶無し(↓)
課題終了後
(スケジュールに
お茶カード)
手元に未開封の
お茶あり
お茶を
教員に手渡す。
お茶あり(↑)

解決策のABC分析

課題終了後
(スケジュールに
お茶カード)

首から提げた
コミュニケーション
ブックあり

構文カードを
教員に手渡す。

お茶あり(↑)

課題終了後
(スケジュールに
お茶カード)

手元に未開封の
お茶あり

お茶を
教員に手渡す。

お茶なし(↓)

【ベースライン】

1. A5版のコミュニケーションブックをトランジッションエリアに設置した状態。

【介入1前事前準備】

1. 携帯式のコミュニケーションブックを作成する。
2. 以前まで使用していてA5版のコミュニケーションブックを本児の見えない所に片付ける。

【介入1】

1. スケジュールに『お茶』を提示する。
2. 本時がスケジュールの『お茶』を取ったら，指導者は本児の2m近くに立ち，携帯式コミュニケーションブックを指さす。
3. 本児が，携帯式コミュニケーションブックから，「〇〇先生」「お茶」「下さい」の絵カードを選び指導者に手渡したら，お茶の蓋を開けて本児に手渡す。

【介入2】

1. スケジュールに『お茶』を提示する。
2. 本児がスケジュールの『お茶』を取ったら，指導者は本児から5m以上離れた所に立つ。
3. 本児が，携帯式コミュニケーションブックから，「〇〇先生」「お茶」「下さい」の絵カードを選び指導者に手渡したら，お茶の蓋を開けて本児に手渡す。

【介入1・2の誤反応時の対応】

お茶を直接手渡す。

↓

携帯式コミュニケーションブックを指さす。

他の場所に行く。走り出す等の行動。

↓

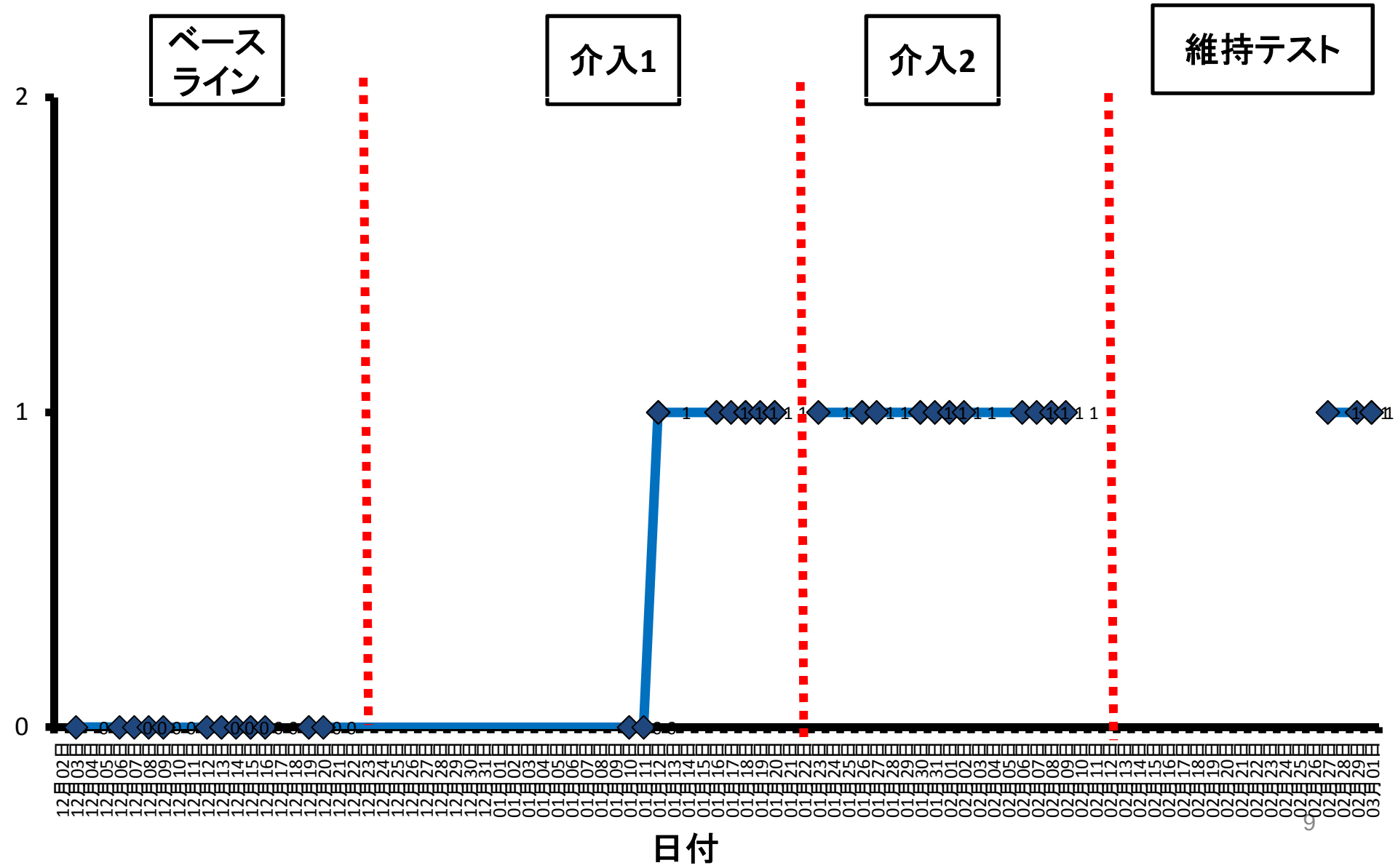
身体的ガイドでトランジッションエリアに戻す。

記録方法

- 本児の行動を得点化し記録をとる。

１点：プロンプト無しで正反応が生起する
０点：誤反応

介入期毎のプロンプト得点



標的行動の記録(結果)

- 介入1の5試行目で標的行動は生起した。
- 介入1が5試行目以降に，6試行連続で標的行動が生起したので，介入2に入った。
- 介入2に入っても，誤反応は観察されず標的行動は生起した。
- 3週間後に再度記録をとったが，誤反応は観察されず，標的行動は維持されていた。

考察

- 標的行動を指導する際に指さしの指示は本児に対して有効であった。
  - 6試行目以降，誤反応が観察されていない。

- 介入のステップは妥当であった。
  - 介入1から介入2に移行しても誤反応は観察されなかった。
  - 介入2では，誤反応は観察されなかった。

短期目標における指導概要

【ベースライン】

1. A5版のコミュニケーションブックをトランジッションエリアに設置した状態。

【介入1前事前準備】

1. 携帯式のコミュニケーションブックを作成する。
2. 以前まで使用していてA5版のコミュニケーションブックを本時の見えない所に片付ける。

【介入1】

標的行動への指導介入。

【介入1の誤反応時の対応】

直接動作での要求。

↓

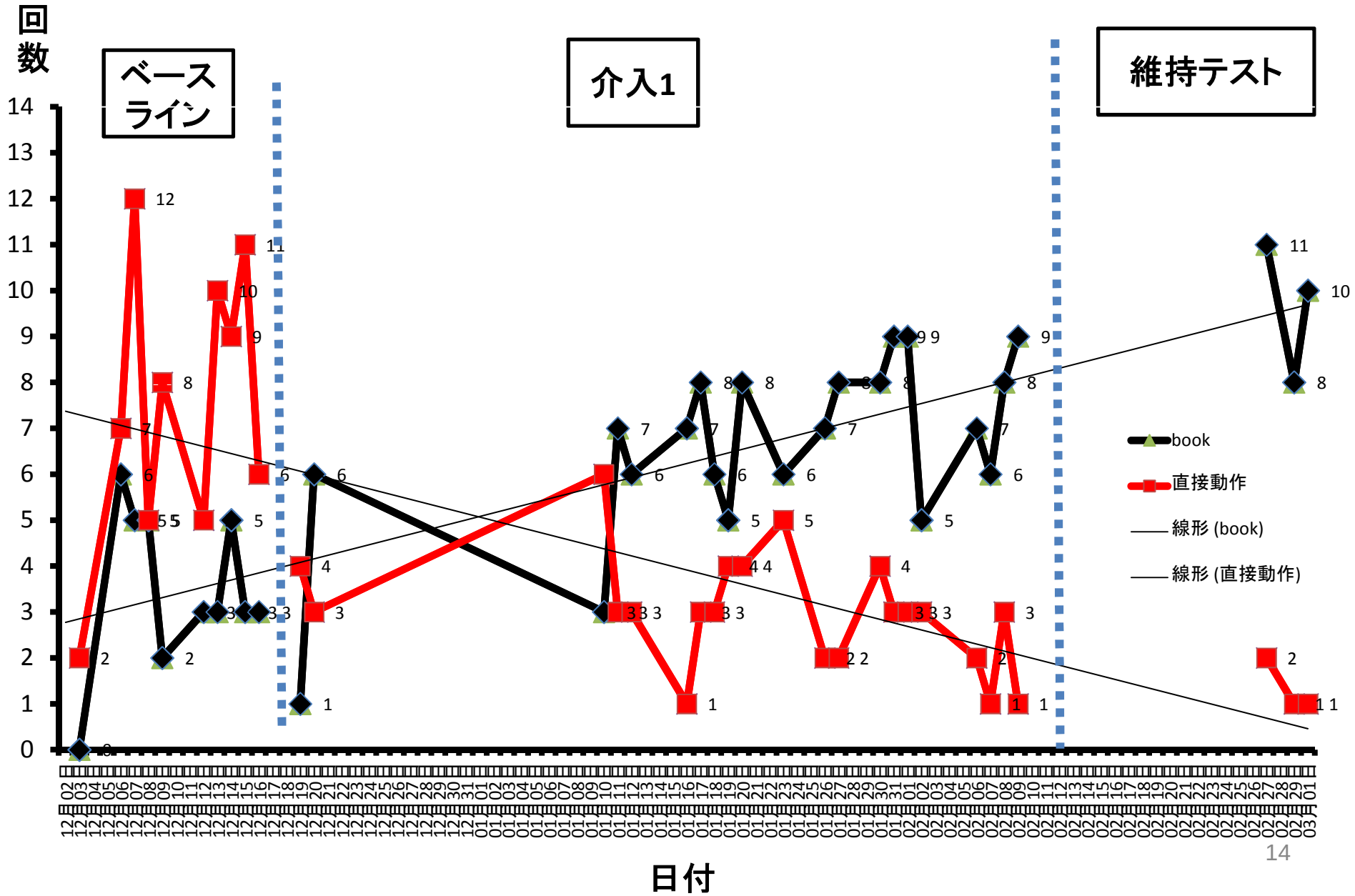
携帯式コミュニケーションブックを指さす。

記録方法

- 本児のコミュニケーションの回数を形態別(コミュニケーションブックと直接的動作)に得点化し記録をとる。

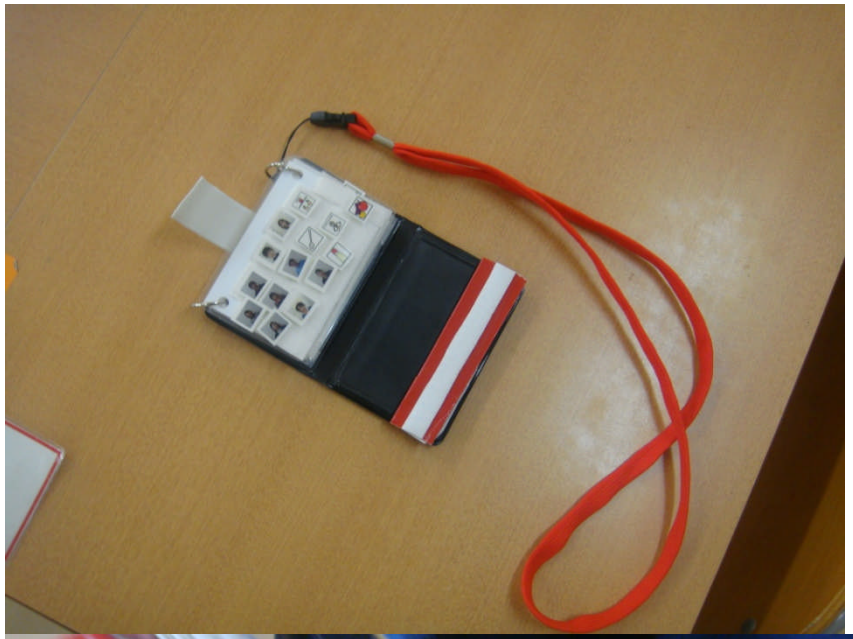
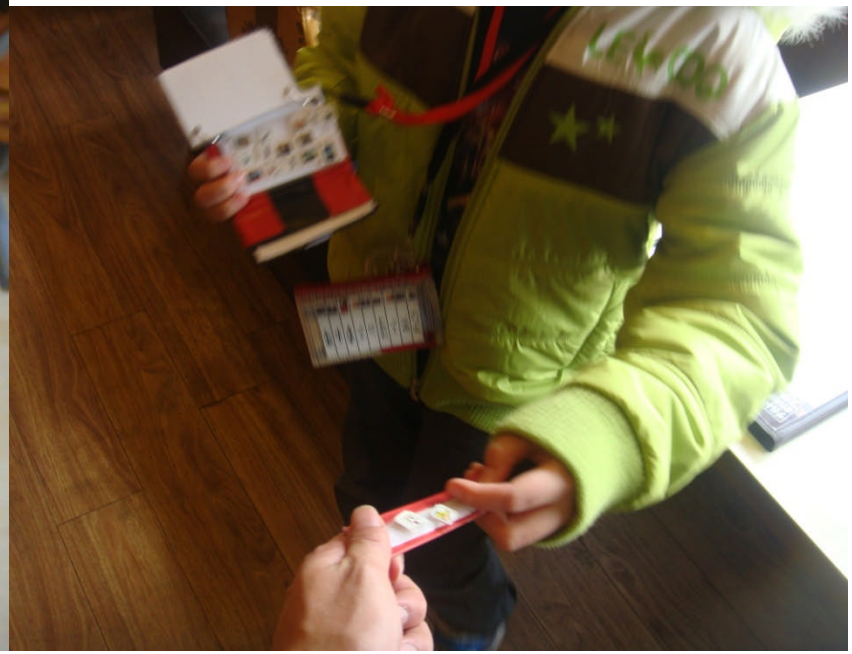
１回：要求のコミュニケーションをする

1日のコミュニケーションの形態(方法)について



短期目標の記録から(結果)

- ベースライン期では，直接的動作の方がコミュニケーションブックを使用してのコミュニケーションより多く観察された。
- 介入1の2試行目の際に，1日の中でコミュニケーションブックを使用してのコミュニケーションが直接的動作を上回った。
- 介入1の4試行目以降は，コミュニケーションブックを使用してのコミュニケーションが直接的動作よりも上回っている。
- 3週間後に再度記録をとったが，コミュニケーションブックを使用してのコミュニケーションが直接的動作よりも上回っている。

考察

- 携帯式コミュニケーションブックを使用することで、本児の意図することが、多くの教員に伝わることが考えられる。
- 携帯式コミュニケーションブックを使用することは，本児にとって妥当であった。
  - 介入1の4試行目以降，携帯式コミュニケーションブックを使用してのコミュニケーションが直接的動作を上回っている。
  - トランジッションエリアに設置したA5版コミュニケーションブックを取りに行くということが，コストとなり，コミュニケーションブックを使用する行動が生起していなかったと考えられる。